

第14回五霞町

青少年の主張大会

第14回五霞町青少年の主張大会が「いばらき教育月間」期間中の11月14日、中央公民館講堂において盛大に開催されました。

当日は、町長をはじめ町議会議員、教育委員、各小中学校PTA会長、社会教育委員、民生委員、青少年育成町民会議委員など多数の来賓や一般聴聞者が出席する中、各小中学校から選抜された10名の児童生徒が、日頃の考えや思い、また将来の夢などを力強く発表しました。

受賞者は次のとおりです。

○五霞町議会議長賞
五霞東小学校5年 栗原 祥

○五霞町教育委員会教育長賞
五霞中学校3年 小野寺南美

○青少年育成五霞町民会議長賞
五霞西小学校6年 青木 柊那

○五霞町青少年相談員協議会長賞
五霞東小学校6年 堀山 優奈

○優秀賞
五霞西小学校5年 宝珠戸美花

五霞中学校1年 荒井 直輝

五霞中学校1年 飯原絵美菜

五霞中学校2年 大木 靖也

五霞中学校3年 青柳 佑



《受賞者名》

(敬称略)

○五霞町青少年問題協議会長賞

五霞中学校2年

佐藤衣呂羽

パラリンピックから学んだこと

五霞中学校 2年

佐藤衣呂羽

今年、4年に一度のオリピックが北京で行われました。

そのかたわらでもう一つ、ある大会が開かれていたのです。パラリンピックです。

私は八年間水泳を習っていました。当時から運動は苦手でしたが嫌いではなく、とりわけ水泳は大好きでした。しかし小さい頃は水が怖くて、顔に一滴でもかかれば泣き叫んでいました。それを克服するために水泳を始めたのです。だから、オリピックも水泳を中心に観ていました。その頃はまだパラリンピックを知らなかったのです。本格的に知るきっかけとなったのはある先生のくれた新聞の切り抜きでした。

「生まれつき右ひじから先がなく、左手は親指と薬指がない。右足は付け根から、左足は太ももの中間から先がない。」というその記事にあった選手の名前は鈴木孝幸さんです。彼は、これらの障害を持っていながらも、意識せず真っ直ぐ泳げるといいます。「まさか。」と思いました。

鈴木選手は普段助けも借りず、左手足を使って歩くそうです。更に、高校までは車イスを使わず、階段の上り下りも一人でこなしたといっています。「人一倍の筋力を持ち合わせている。」と記事には書かれています。

彼をそんなにも頑張らせた原動力は何だったのでしょうか。

もし私だったら絶望し、生きる気力さえなくしたことでしょ。助けを求めて拒まれたり、嫌がられたりされたら人間不信に陥り、世の中を、家族を恨んでいたかもしれない。

でも、鈴木選手はそんな不安をもたせず、パラリンピックで金メダルを勝ちとったのです。水泳と共に生きるという信念を持ち、昨日より今日、今日より明日という向上心を糧に、頑張ってきたに違いありません。

私には何度も水泳を辞めたいと思う時期がありました。しかしそのつど「一度やり始めたらやりきってみせる。」と思い踏み留まりました。今は部活との両立が厳しいため中断していますが、私の中であの時の気持ちが生きています。もし私に水泳がなかったら、ちゅうと半端な人間になっていたはず。

「パラリンピックと五輪が少し近くなり、うれしかった。頑張っている姿を見てもらい、パラリンピックも好きになってもらえようようにしたい。」鈴木選手のこの言葉に励まされた人は少なくないと思います。一歩が踏み出せない人、努力してもなかなか実を結ばない人、私を含め、多くの人に彼は勇気と希望をくれました。ひたむきに頑張っている人が美しいのは、人間としての気高さが伝わってくるから

だと思えます。国境を越え、人種を越えて、五輪とパラリンピックは並び立っているのです。

鈴木選手が金メダルを取ったことは素晴らしいことです。しかしたとえメダルが取れなかったとしても、努力した日々は消えませんが、輝きは色あせないからで。そうしてその記憶は、後に続く人生を変えてくれるのではないのでしょうか。「努力した心は報われる。」そう思いました。「自分も頑張らなきゃ」と。

パラリンピックで学んだこと、それは、障害をハンデとあきらめず、ありのままの自分を肯定すること。障害を越えて全力を出し切ろうとする人間の美しさです。

最後に、たくさん感動を与えてくれた選手の皆さんと私たちを結んでくれたパラリンピックに、そしてこのスピーチを聞いてくれた皆さんに、感謝の気持ちを手話で表したいと思えます。「ありがとう。」



発表する佐藤さん